

ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学 薬学部

教授 国分秀也

作成日:2024年9月24日

1. 教育の責任

本学は「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」という建学の理念をもとに、継続的学習力、想像力、そして課題解決能力を育む「幅広い教養教育」と、エビデンスに基づいた専門知識・技術の修得を基盤とした、責任感と使命感を持って自律的、主体的に実践能力を発展させていく医療従事者の養成を基本的使命としている。とりわけ、豊かな人間性と高度な専門性を併せ備えた人材の養成、臨床現場でチーム医療できる人材の養成、地域に必要な医療人の養成を行い、地域社会に貢献できる職業人を輩出することを主たる目的としている。

教員は、医学、薬学、看護の領域において、広い社会的視野の下に包括的に問題点をとらえ、その解決を科学的、創造的に行うために、自立して独創的研究活動を遂行するために必要な高度な研究能力とその基礎となる豊かな学識と優れた技術を有する医療人を育てる必要があると考えられる。したがって、私は、よりよい医療を提供するために必須となる患者個別医療を中心に以下の教育について担当する。

担当科目：

- 「臨床薬理看護学」(看護学科 2 年次)
- 「臨床薬理学」(看護学科大学院 1 年次)
- 「感染看護学特論Ⅳ」(看護学科大学院 1 年次)
- 「早期臨床体験実習」(薬学部 1 年次)
- 「薬学総合プレ研究」(薬学部 3 年次)
- 「実務実習事前学習Ⅰ」(薬学部 3 年次)
- 「実務実習事前学習Ⅱ」(薬学部 4 年次)
- 「実務実習事前学習Ⅲ」(薬学部 4 年次)
- 「処方解析演習」(薬学部 4 年次)
- 「薬物治療学Ⅳ」(薬学部 4 年次)
- 「薬物治療学Ⅴ」(薬学部 4 年次)

チューター活動：

グループ学習・学習面談(薬学部 2 年生)

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私は、25 年間臨床薬剤師として活動して、医師や看護師など多くの医療スタッフとともに患者の薬物治療に携わってきた。それぞれの職種は、違う専門的な知識、技能を有し、治療に貢献している。薬剤師は、特に薬物治療に特化し、患者に最適な薬物治療を行う必要があると感じてきた。薬の治療効果や体内暴露量には個人差があり、薬剤師は、患

者個々の状態や併用薬剤の違いにより、最適な薬の選択と投与量設計を行う必要があると思います。また、薬の開発は、臨床試験を行うことで可能となり、臨床試験結果の解釈が間違えると患者に不利益が生じることもあり得るため、臨床試験論文の批判的吟味を行える力も必要になる。

私の教育理念は、「個別化薬物治療」に貢献できる医療人を育てることである。そのためには、疾病、治療計画、薬理作用、および薬物動態の知識を十分に備えていることが必要あり、また、それらを考えることができる問題解決能力も必要である。学生には、知識をインプットすることだけにとどまらず、目の前の患者に対して薬物治療をどのように行うべきかを考えられる力を身に着けることを期待している。さらに、臨床試験論文を正しく判断できる能力は必須であり、批判的吟味を行える力を身に着けていただきたい。

2) 理念をもつに至った背景

臨床薬剤師としての活動の多くは、TDM(Therapeutic Drug Monitoring)業務に携わってきた。薬は、同じ投与量でも投与スケジュールを最適にすることで、劇的に治療効果を改善することが可能である。例えば、アミノ配糖体抗菌薬であるゲンタマイシンを1日3回で投与していたところ1日量は同量で1日1回に変更したところ次の日には解熱し、炎症反応(CRP)を1週間で正常化した症例を経験した。また、抗がん薬は休薬期間が必要なものが多く、休薬せずに骨髄抑制で入院に至った患者も経験している。そのような経験から薬剤師が薬の選択や投与量設計を患者個別に行うことで、最適な薬物治療を行うことが可能となるため、私の教育理念の背景です。

3. 教育の方法・戦略

薬の選択、投与量設計について、個々の患者で実践できる知識、技能を習得できるように講義、演習、および実習を行い、各疾患における治療計画、薬理作用、薬物動態、薬物間相互作用等について教育を行う。さらに、臨床試験、医療統計、学術論文の読み方等も教育し、医薬品の適正使用を実践できるように教育する。

3-1.教授方法

知識を習得する目的で、スライドを用い、解説を最初に行う。解説は、一方的な講義にならないように質問形式で進めていく。また、重要な部分や計算を伴う内容の場合、ホワイトボードも使い、スライドと併せて解説を行う。次に、知識の確認のために、患者模擬症例を提示し、学生に考えてもらう。学術論文の読み方を教える際は、事前に論文を与え、予習してきてもらう。常に、学生主体で考えさせることで学習効果があがると考えられる。

3-2.授業の工夫

表、図、写真、およびイラストを多用し、理解しやすいように資料作りを心掛ける。また、

同種同効薬の違いを明確に一覧表にして、薬の選択方法を習得させる。さらに、臨床薬理の内容が中心となるため、基礎薬学の内容が臨床とつながるように基礎的な部分も含めて解説を行う。例えば、基礎薬学では薬物血中濃度計算式を学習するが、患者症例を想定していないため、私の授業では、計算式の解説から症例検討まで一連の流れが理解できるような授業とする。また、アウトプットとして、スライドによる発表を行い、ディスカッションを多くするようにしている。

3-3.開発した教材

- ・お薬カルテ
- ・緩和医療薬学(改訂第2版) 南江堂
- ・ゼロから学ぶオピオイド がん疼痛管理実践マニュアル 日経 BP
- ・実務実習事前学習テキストブック 京都廣川書店
- ・がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン日本緩和医療学会ガイドライン委員会
- ・パートナー薬剤学 改訂第2版 南江堂

3-4.授業以外の諸活動

- ・担当学生に対して定期的に学習面談開催
- ・授業内容の質問として、月曜日から金曜日の 12:00-13:00 で受け付けている。
- ・日本緩和医療薬学会の研究推進委員会委員長として、薬剤師の研究に対して、サポートを行い、卒後教育にも従事。

3-5.自己研鑽

最新の疾患ガイドラインを入手し、日々知識の習得に努めている。様々な医療系の学術大会に参加し、最新の知識、技能を習得している。他機関共同臨床試験を多数行い、日々研究能力の向上を行っている。

4. 学習成果

- ・処方解析演習(薬学部4年次前期)

お薬カルテを作成し、授業の最初に小テストを行った。学生から高評価をいただいている。

- ・処方設計を目的として授業(前職薬科大学)

学生全員から高評価をいただいている(学生コメント:理解が深まった、勉強になった、処方設計の授業を多くしてほしい、など)。

- ・事前実務実習(前職薬科大学)

TDM、処方提案、DIの実習を担当し、「難しい」との学生からのコメントを多くもらった。それぞれ3時間30分の短時間の実習であったため、まず知識の習得を丁寧に教える必

要があったと考えられる。

- ・担当学生の個別指導(前職薬科大学)

前職薬科大学在職期間中に担当した6年生6名全員が薬剤師国家試験に新卒者として合格している。

5. 改善のための努力

- ・授業の難易度の改善

薬学部は主に1~3年次で基礎薬学を学び、4年次以降の臨床薬学を学ぶことになる。臨床薬学関連の授業は、基礎と臨床をつなげるパイプ役でもあるため、授業資料の作成に当たり、図、表、写真、イラスト等を多用し、学生にイメージしやすいような資料作りを心掛ける。そのためには、各疾患や詳細な薬理、薬物動態を教員が十分理解していることが重要であるため日々最新の知識を得るように努力する。

6. 今後の目標

- ・短期目標

実務実習事前学習I,II,III(薬学部3年次後期、4年次前期)、薬物治療学IV,V(4年次後期)、臨床薬理看護学(看護学科2年次)、および処方解析演習(薬学部4年次前期)の授業資料およびプログラムを作成する。達成時期は、それぞれ2024年9月、10月、および2025年3月とする。

- ・長期目標

2027年大学院認可を念頭に学生を募集するとともに臨床研究を実施できる薬剤師の育成を行っていく。後ろ向き観察研究、前向き観察研究、臨床PPK、PKPD研究を実施していく。患者個別医療が実施できるような臨床研究実施に努める。

【添付資料】

- ・処方設計を目的として授業のシラバス、講義配布資料
- ・事前実務実習(TDM、処方提案、DI)のシラバス、講義配布資料
- ・卒業論文(タイトル:ナルデメジンの臨床効果に関する調査検討)
- ・卒業論文(タイトル:免疫チェックポイント阻害薬における副作用調査)
- ・卒業論文(タイトル:がん疼痛患者におけるメサドンの適正使用に関する調査研究)
- ・卒業論文(タイトル:がん性疼痛に対するケタミンの使用に関する調査研究)
- ・卒業論文(タイトル:オピオイド鎮痛薬と抗がん薬の薬物間相互作用に関する調査研究)